

宗祇句集「萱草」本文考

両角倉一

一

連歌師宗祇の自撰句集として付句と発句とを収める総合的なものとしては、五十代の「萱草」、六十代の「老葉」（初編本――再編甲類本――再編乙類本――再編丙類本）、七十代の「下草」（甲類本――乙類本――丙類本――丁類本）などが知られている。その始発の位置を占める「萱草」は、六卷（春・夏・秋・冬・恋・雑）という素朴な部立や雑連歌の部に俳諧体の句を収める事など、以後の自撰句集とはきわだった差違を持っていて注目される。しかし、その編集態度や表現の特色など文芸性の追求をする前段階として、この句集の伝本の本文の検討をする必要がある。

「萱草」の伝本に関する近代の研究をふりかえてみると、まず、明治四十五年五月に零本の続群書類従本（原本は宮内庁書陵部蔵）が活版本続群書類従第十七輯として翻刻されている。最初の翻刻として有意義であるが、本文が必ずしも良質でない事、乱丁がそのままで翻刻されている事、第五、六のみの零本で、第一、四を欠いている事などが惜しまれる点である。次いで、頼原退蔵氏稿「宗祇の萱草・老葉・下草」（『松井簡治博士古稀記念論文集』昭和7・2目黒書店刊）において完本の松井簡治氏蔵連歌集書本（静嘉堂文庫現蔵）が紹介され、さらに、宇野量介氏稿「連歌史上の二つの新資料」（『国語と国文学』昭和8・12）における高野辰之氏蔵斑山文庫本（宮内庁書陵部現蔵）、浅田善二郎氏稿「守武筆萱草について」（『立命館文学』第5号、昭和9・5）における神宮徴古館蔵荒木田守武筆

本というように諸本の紹介があいついでなされた。右三論文は各伝本の紹介をふまえて、共にこの句集の成立年代に言及するが、守武本奥書に所拠した浅田氏の文明五年末、文明六年春成立説がもっとも事実に近い。浅田氏論文と同年に発表の伊地知鐵男氏稿「宗祇著作襍攷」（『国文学研究』第3号、昭和9・11）では上野図書館蔵本（国立国会図書館現蔵）と神宮文庫蔵所蔵齋本（文庫目録で「春連歌」として見える零本）をあらたに加えて、前掲の続群書類従本・松井本・斑山本等と比較しつつ、上野本の末に付載の別筆の一本奥書（守武本の奥書と同文）によって浅田氏と同じ文明六年春成立説を提出されている。なお、上野本付載の一本奥書の端書の「当今御所被遊たるよしにて」の一文に注目して、その本奥書の執筆者を足利義尚と推定されたのは新しい指摘である。ただし、同氏著『宗祇』（昭和18・8青梧堂刊）以後は、足利義政の執筆と訂正されている。

戦後の研究では、小西甚一氏校『宗祇連歌集、萱草』（昭和28・9古典文庫刊）が最初の完本の翻刻として有意義なものである。底本は荒木田守武筆本で、浅田論文で紹介された後半部（神宮徴古館蔵）に未紹介の前半部（昭和十一年に神宮文庫に奉納）を合わせての翻刻。巻末に静嘉堂文庫連歌集書本（前掲松井本）との校異を付載する。守武筆本は、後に伊地知鐵男氏校「続群書類従、第三十六輯、拾遺部」（昭和47・11）にも翻刻された。古典文庫本の誤植等を正し、詞書の多い伊地知氏所蔵の善本によって校補されており、これも有益な翻刻であった。また、『国書総目録、第八巻』（昭和47・2岩波書店刊）で、前掲諸本の他に、宮内庁書陵部蔵卷

この句集の表現研究としては、湯之上早苗氏稿『宗祇句集』萱草社『雑部の問題―俳諧雑纂部の性質―』（『国文学攷』第60号、昭和47・12）が正面からとりあげた唯一の論文で、拙稿『宗祇自撰句集の句形修訂について』（『連歌俳諧研究』第44号、昭和48・3）においてもこの句集について少々触れる所があった。しかし、この表現研究を押し進めるためには、前述のように、現存諸本を総合的に系統づけた本文研究が必要である。次に、私の分類試案を提示し、先学同行の研究との相補を期する事にした。

〔清書本系統〕

(第一種) ①伊地知鐵男氏藏本(伊地知本。略称、以下同じ)

②京都大学蔵谷村文庫本（谷村本）

③京都大学蔵穎原文庫卷子本（穎原卷子本）

④宮内庁書陵部蔵伝肖柏筆卷子本（書陵部卷子本）

(第二種) ⑤宮内庁書陵部蔵斑山旧蔵本(斑山本)

⑥東北大学蔵狩野文庫本（狩野本）

⑦京都大学蔵類原文庫冊子本（類原冊子本）

⑧神宮文庫・神宮徴古館藏荒木田守武筆本（守武本）

⑨ 靜嘉堂文庫藏連歌集書本（集書本）

「草稿本系統」

(第五種) ⑩東北大学蔵狩野文庫別本(狩野別本)

⑪大 阪 天 滿 宮 文 庫 藏 滋 岡 本 (滋 岡 本)

⑫大阪天満宮文庫蔵南曲本（南曲本）

⑬ 祖宮文庫藏所臘齋本（所臘齋本）

⑭天理圖書館藏絳屋文庫本（天理本）

⑪宮内月書院音廣綴君書類從原本（綴類從原本）

⑬国立公文書館蔵内閣文庫続群書類従写本(続類従内閣本)

他に、未見の写本として、⑮太田武夫氏藏本・⑯秋月郷土館藏本・⑰広島大学蔵福井文庫本などがある。⑰⑱は湯之上早苗氏の御教示によるもので、⑲は第一種本、⑳は第六種本の由である。㉑は㉒集書本の転写のようである(湯之上早苗氏・小川幸三氏編「福井文庫目録」〔中世文芸叢書別巻三〕『中世文芸五十号記念論集』昭和48・1)。

なお、大東急記念文庫蔵「宗祇名句切」(書架番号四一二二一・一六一三三)は巻軸仕立ての一枚で、内容は「萱草」第四冬連歌の「世にふるもさらに時雨のやとり哉」以下、発句九句の部分である。断簡であるため、本文の性格はあきらかではないが、第一種本のように感じられる。

11

諸本分類の基準などの検討にはいる前に、各写本の句数と書誌解題を掲出しておく。

◇第一表〔諸本句数一覽表〕

※第一表の内、括弧したものは連続した欠腕のある部分である

※書誌解題の見出しの各写本の名称の下に括弧内の数字は書架番号

(一)				分類	部立
④ 書陵部卷 子本	③ 類原卷子 本	② 谷村本	① 伊地知本	諸本	
		69	69	発句	第一
		91	91	付句	春
		(24)	34	発句	第二
		(45)	49+2	付句	夏
		54	54+2	発句	第三
		89	89	付句	秋
		(21)	42	発句	第四
		(57)	59	付句	冬
	112	112	112	付句	第五恋
(184)		364	364+2	付句	第六雑
			句の 六 は 校 異 の プ ラ ス ア ル フ ィ		備考

(九)	(八)				(七)	(六)		(五)	(四)	(三)	(二)		
⑬国会本	⑭続類從内 嘉室本	⑮続類從内 閣本	⑯続類從原 本	⑰天理本	⑱所蔵齋本	⑲南曲本	⑳滋岡本	㉑狩野別本	㉒集書本	㉓守武本	㉔頼原冊子 本	㉕狩野本	㉖斑山本
69				68	67	66	67	66	68	68		(58)	(58)
88				91	91	91	92	(80)	89	90		(75)	(75)
32				34	34	34	34	29	31	33		34	34
48				50	49	51	51	47	48	47		57	57
53				54	54	53	53	49	54	54		54	54
88				89	86	90	90	(36)	87	88		111	111
42				43	40	43	43		42	(19)		42	43
56				59	59	59	59		58	(58)		65	65
78	110	110	110	110		111	111		111	112	121	121	121
(343)	(334)	(334)	(334)	(334)		365	366		359	359	307	307	308
と落丁でなく、 とびとびの欠句 とある。							春付句は他本よ う多いが、重出 句と一語が重出 している。				同 右。	同 右。	特殊配列による 句数の異質性に ついては書誌解 題⑤を参照。

分類	参 考	
	部 立	校 合 本 ①⑭の
第一 春	発句	69
	付句	91
第二 夏	発句	34
	付句	49 + 2
第三 秋	発句	54 + 3
	付句	89 + 1
第四 冬	発句	43
	付句	59
第五 恋	付句	112
第六 雑	付句	364 + 3
備 考		配列⑤以外の句は諸書本 校合し、⑦の特異句は通 じ、⑧は普通句で、

①伊地知鐵男氏蔵本

袋綴横本一冊。縹色無地の紙の表紙。外題なし。一面十二行、墨付八十
六丁。本文の奥に、

「此一帖者連歌好士宗祇以自句編集之誂青蓮院准后加清書於外題宗祇
依所望染禿筆者也 干時文明六年夾鐘下澣書之」

と本奥書がある。書写者の奥書はないが、江戸時代の写しとおぼしい。後
に言及するように、文中、異本との校異を「イ」として傍書し（この「イ」
の中に他本には見られない独自句が一句ある）、また、第六雜連歌の部に
付箋があり、付句二（いずれも第六種本の独自句）を記載する。表紙の見
返しに「岸名蔵書」と墨書し、初折表に「伊地知氏書冊」の朱印がある。
前述のように、この写本は『続群書類従、拾遺部』の校補に用いられて
いる。

②京都大学附属図書館蔵谷村文庫本（四一二四、ワ二）

列帖装（綴葉装）半紙本一帖。金色の模様入りの布（一部分のみ現存）
の付いた表紙で、見返しは金銀砂子。外題なし。一面十一行、墨付九十二
丁。第一春連歌の部と第三秋連歌の部に乱丁、第二夏連歌の部に一丁分（
発句十、付句二）の欠句（落丁ではなく、転写の際の誤脱と思われる）、
第四冬連歌の部に二丁分（発句二十二、付句三）の落丁がある。本文の奥
に①伊地知本と同じ本奥書があり、続けて、同筆で、

「此一冊彼好士懇望難黙止加愚筆之処式部卿宮披読之次々録右奥書行
而已 干時文明第六閏逢敦祥藏沾洗下一作□之 北麓野叟」

とある。室町時代の古写とおぼしい善本であるが、落句のあるのが惜しま
れる。初折表に旧蔵者（秋村、谷村一太郎氏）と京都大学図書館の朱印が

ある。

③京都大学国文学研究室蔵頼原文庫卷子本(Gi-1-3)

一卷。内容は、第五恋連歌(全)のみ。布の表紙は、青と茶の格子で、各柙目ごとに花模様(鳥をあしらった部分もある)があり、見返し金泥砂子。外題なし。縦二十六・二センチ、横十六・五センチの鳥の子紙二十六枚よりなる。各紙十行書き。なぜか、複雑な錯簡を呈しているが、清書本の原型を思わせる良好な本文で、次の④と共に、現存最古(室町中期)の写本と思われる。奥書識語などなし。

④宮内庁書陵部蔵伝肖柏筆卷子本(五〇九-二四)

一卷。内容は、第六雑連歌の一部分のみ(古典文庫本の番号で、冒頭より七八四の前句まで)。外題なし。紋様入りの檜皮色の布の表紙で、見返しは金泥。③頼原卷子本と同じ大きさの鳥の子紙三十九枚よりなる。各紙十行書き。室町期の古写と思われるが、肖柏の筆になるものかどうかは確認していない。奥書識語などなし。

⑤宮内庁書陵部蔵斑山高野辰之氏旧蔵本(一五四-四六五)

袋綴半紙本一冊。紋様入りの赤褐色の紙の表紙の左上に草葉模様の題簽「忘れ草」と記す。一面十一行、墨付百丁。異本との校異を朱で行間や句頭に記す(校異本は後掲の奥書(カ)の「毛利家蔵古写本」であるが、現存の⑨集書本と同系統の本文である)。第一春連歌は冒頭の発句十一(1より11まで。番号は古典文庫本による。以下同じ)と付句(80より106まで)が欠けているが、他は完本に近い。第二種本の共通の特色として、第六雑連歌の雑四季・雑恋を第一・五の各末尾に付載し、雑連歌中の旅連歌を第六末尾に置くなど変わった配列を持つ。冒頭に「斑山文庫」「図書寮」の方朱印がある。この写本は前述のとおり宇野量介氏によって紹介された事があるが、改めて奥書を列挙しておく。

(ア)「此一帖者連歌好士宗祇以自句編集之詔青蓮院准后加清書於外題宗祇依所望染禿筆者也 文明十五年六月廿五日」

(イ)「此一帖自然齋種玉庵釈宗祇自句の心に入て侍る也 撰あつめをかるゝの題は青蓮院准后遊れし也 好道輩恐味へきもの歟 生玉庵宗甫判」

(ウ)「右萱草者坂昌成家蔵之本ヲ以テ書写早 寛政十年十一月廿日章甫」

(エ)「寛政十二年庚申春正月十五日 古写一本ヲ以校合早 秋部発句の末より古写本にあり、その前文闕たり 無念の本也 章甫」

(オ)「この萱草はさいところ同じ道に心さす通孝ぬしのもとめにまかせてうつし置ぬ 紙のしりへにこと書せよとせちにすゝめらるゝにより文化十一年霜月のはしめ藤原豊喬しるしをく事しかり」

(カ)「毛利家蔵古写本ヲ以一枚早 文化十一年八月二日 通孝」(この奥書のみ朱書。「通孝」は幕府連歌連衆の山田通孝)。

⑥東北大学附属図書館蔵狩野文庫本(四一-〇九六三)

袋綴半紙本一冊。零本の「萱草」(後掲の⑩)と「宗祇発句判詞」とを合綴。薄茶色の横縞のはいた紙の表紙の左上の題簽に「萱草」と記す。一面十行。墨付、⑥「萱草」の部分九十九丁、⑩「萱草」の部分二十五丁、「発句判詞」の部分十六丁、計百四十丁。奥書は、⑥の部分の奥に、⑤斑山本(ア)と同文を記し(ただし、(イ)の末尾に宗甫の花押の写しを記載)、そのあとに、

「右わすれ草の上下 四季上 恋雑旅下 二冊ハ章甫の許より恩借してうつし侍りぬ 寛政九年十一月七日 勝(花押)」

とあり、この写本全体の奥に、

「右萱草并祇公発句判詞二卷勝仙翁之蔵書恩借して写置もの也 文政二年臘月 知周」

とある。「知周」は天理図書館蔵『古代連歌抄』の著者、高橋知周(伊勢の人で、香川景樹の門人)であろう。斑山本と異なり、この写本には校異はない。狩野文庫と東北大学の蔵書印がある。欠句・配列等斑山本に同じ。

⑦京都大学国文学研究室蔵頼原文庫冊子本(Gg-1-2)

袋綴半紙本一冊。第五く六のみの零本。表紙の左上の題簽に「宗祇法子輪寿例愚左下」と記す。一面十三行、墨付三十七丁。奥に⑤斑山本の奥書(イ)と同文を記す(ただし、(イ)の署名は「生玉庵宗甫」とあるのみで、「判」や花押写しなどなし)。異本との校異はない。京都大学の蔵書印がある。配列は⑤⑥に同じ。

⑧荒木田守武筆本(上冊(第一く三) 神宮文庫蔵(三七六五)、下冊(第四く六) 神宮徴古館蔵(二八二〇))

袋綴横本二冊。上冊は淡色の表紙。外題なし。一面二十行、墨付二十丁。初折表に「神宮文庫」の方朱印。二十折裏に「昭和十一年六月一日奉納、神宮御文庫、大阪市八田兵次郎」の朱印がある。下冊は改装の白無地の紙の表紙の左上の題簽に「宗祇句集 萱草 四、五、六」とある。一面二十行、墨付三十丁。①伊地知本と同じ本奥書がある。印記はなし。下冊には一丁分の落丁と複雑な乱丁がある。両冊とも同筆で、書写者の識語はないが、あきらかに守武筆であり、「守武壮年期の筆写」(神宮司庁編『荒木田守武集』昭和26刊)と推定されている。下冊は前掲浅田氏の論文に詳しい紹介があり、両冊については前掲の小西甚一氏校『宗祇連歌集、萱草』(古典文庫)に解説がある。この写本の再度にわたる翻刻については前に述べた。①く⑦にくらべて詞書がやや少ない。

⑨静嘉堂文庫蔵連歌集書本(五二三一―八一二七―一八)

袋綴袖珍本二冊。松井簡治氏旧蔵の連歌集書所収の完本(上冊第一く四、下冊第五く六)。淡黄色網目表紙左上の題簽に「萱草上(下)」とある。一面七行。墨付、上冊七十一丁。下冊七十一丁。①伊地知本のような本奥書はないが下冊の奥に、朱書で、

「発句百九十六句 付句七百四十五句 合九百四十一句 毛利讃州家蔵古写本ヲ以テウツス 萱草正本トミエタリ」

とあり、その奥に、墨書で、

「天保四巳年三月十日(花押)」

は前掲⑤斑山本の奥書(カ)に見える「毛利家蔵古写本」と同じものであろう。この写本は、前述のように、頼原退蔵氏によって紹介された。松井文庫と静嘉堂文庫の蔵書印がある。発句には詞書があるが、付句にはないのがこの写本の特色である。

⑩東北大学附属図書館蔵狩野文庫別本

前掲⑥に合綴の零本で、第一より第三の途中まで。体裁・墨付などは⑥の項で記した。内題「忘草」。本奥書はないが、この零本の部分の奥に、

「右祇公萱草明和元年七月十五日源勝延書写之一本を得て秋の部迄騰写さきに勝仙老人之蔵書を写し置ぬる本と校合せしに全く同本にしてすこしく足らざるのみ よって秋の部半にして筆を止む もとより予此道に耽るのあまり別本とこゝろうる儘早卒に筆を取し誤也 愚なるわさにてそ 文政三年二月 知周」

とある。第二夏の部の最初の一句を除いて全く詞書のない事、零本ながら、特異句の比較的多い事などに特色がある。

⑪大阪天満宮文庫蔵滋岡本(れ三一五)

袋綴横本一冊。淡色の紙の表紙の左上に外題を「草塵抄」と墨書。内題も同じ。一面十一行、墨付九十四丁。①伊地知本の本奥書はなく、本文の後に、

「専順語句少々」

鳥の声さへ春めきにけり
あかつきをさかひに年や越ぬらん
尋る花にいく木すくらむ

梅か香をそこと定め春の風

いはてたゝにや花にちるらん

山里の春をつけこす人もかな

ゆきてそとはん夕暮の空

つらからぬ里のあるしと秋のきて」

と専順の付句四(すべて石村雍子氏翻刻横山重氏蔵「法眼専順連歌」に所

収の句」を付載。奥に、

「文化四年丁卯林鐘日」

とあり、文化四年六月、大足軒滋岡長松の書写。本文中に朱の添書がある。蔵書印「滋岡庫」。

⑫大阪天満宮文庫南曲本（れ丙一五）

袋綴横本一冊。朽ち葉色の斜線縞の紙の表紙の左上に外題を「草塵集、全、宗祇」と墨書。内題「草塵抄」。一面十三行。墨付七十六丁。本文の後に「専順句少々」として⑪滋岡本と同じ付句四を付載。奥に、

「右全部大足軒の原本によりてうつし早ぬ 文化四年八月 南曲 洞延宗（花押）」

とあり、右の滋岡本と兄弟関係の写本か。ただし、滋岡本の朱の添書のある部分は添書のを採用しており、その他にも小異がある。「天満菅廟御文庫奉納書籍標印不許売買」の朱印がある。

⑬神宮文庫蔵所臘齋本（二〇八七）

袋綴中本一冊。第一〜四のみの零本。縹色の紙の表紙に外題を「春連歌全」と朱書。内題はなく、冒頭の部立「春連歌」より本文が始まるため、それを仮に外題としたものらしい。初折表は一面八行であるが、初折裏以降は一面九行、墨付五十七丁。奥に、

「文明十五四月写之 筆者所臘齋」

とあるが、江戸時代の写本か。初折表に、「林崎文庫」の方朱印と長方朱印。奥書のあとに、「天明四年甲辰八月吉旦奉納 皇太神宮林崎文庫 不期不朽 京都勤思堂村井古巖敬義拜」の朱印がある。

⑭天理図書館蔵綿屋文庫本（れ三・一―二四）

袋綴美濃本二冊。上冊は第一〜四、下冊は第五〜六を収める完本。両冊とも土色の無地の紙の表紙の左上の題簽に「萱草上（下）宗祇句帳」とある。両冊共に一面十行。墨付は上冊四十九丁、下冊四十五丁。奥書なし。印記は、天理図書館と綿屋文庫の他に、「西荘文庫」（伊勢松坂の小津桂窓

の文庫）の朱印、「子孫永保、共二巻、愛煙家蔵書記」の墨印がある。下冊本文は語句表記共に次の⑮続類従原本に一致する。

⑮宮内庁書陵部蔵続群書類従原本（四五三―二）

袋綴中本一冊。第五〜六のみの零本。『続群書類従』活版本の底本である。題簽は「萱草」「続群書類従四百八十五」の二枚。内題「萱草下」。本奥書なし。一面九行、墨付五十丁。落句や乱丁がある（活版本はそのまま翻刻している）。静嘉堂文庫所蔵の塙氏旧蔵『続群書類従目録』には、この書名の下に、「金性院、下許アリ、上卷ナシ」の注があるという（伊地知鐵男氏稿『群書類題』連歌部）。前述のように、本文・表記等が⑭天理本の下冊と一致する。

⑯国立公文書館蔵内閣文庫続群書類従写本（二六一―一）

袋綴美濃本一冊。全一一八七冊の内の一冊で、茶色無地の紙の表紙の左上の題簽に「続群書類従四百八十五」とある。一面十行、墨付四十六丁。

⑮続類従原本の副本として転写されたものらしく、同文であるが、表記に小異がある。本奥書や書写者の識語なし。「大日本帝国図書印」「日本政府図書」の方朱印がある。なお、この写本では⑮の落丁や乱丁の部分をそのままに書き続けており、丁付けや行数が⑮とずれているため錯簡がわかりにくくなっている。

⑰静嘉堂文庫蔵続群書類従写本（三〇三―三）

袋綴一冊。美濃本よりやや小。全二四四冊の内の一冊で、「老葉」「春夢草」と合綴。茶色無地の布の表紙の左上に題簽「続群書類従 連歌部、自第四百八十五上」とある。一面十行。墨付は、「萱草」の部分四十七丁、全体二百二十七丁。行数・墨付（本文四十六丁、識語一丁）・表記などいざれも⑮の写本に一致する。⑮の原本ではなく、⑮の副本を忠実に転写したものであろう。「萱草」の部分の末尾に、

「明治十二年七月四日 筆者

数原元可

同年七月十日 一校了

数原尚樹（この行、朱書）

同月十六日 一閱了
同年同月内務省納清書 数原元可 (この行、朱書)

同十七年八月廿五日加一校了 小野由久 (この行、朱書)
とあり、識語に示すように、本文中、朱書による校訂のあとが散見する。
印記は、静嘉堂文庫の長方朱印のみ。

⑮国立国会図書館蔵本(W一六一九二)

袋綴一冊。美濃本よりやや小。上辺藍色、下辺薄茶色の墨流しの紙の左上の題簽に「萱草 完」とある。一面十行、墨付八十二丁。奥に、

「大永二年二月廿五日書之 数度校合早 興(花押)」
とあり、その右肩に別紙極め書き、

「此萱草 高野山本食
興山上人筆跋」

が添付されている。ただし、前掲伊地知氏の論文で指摘されたように、大永二年は興山上人応其の出生以前で時代が合わない。また、その前のページに添付された別紙に、

「宗祇家集萱草 一本奥書 当令御所被遊たるよしにて」
の端書で①伊地知本と同じ本奥書を記す。この国会本は詞書が無く、欠句が多い。

三

宗祇の自撰句集としては、後の「再編老葉」「下草」などは宗祇自身の数段階にわたる切り継ぎを経て、所収句に大幅な異同があり、三類ないしは四類に大別されるけれども、この「萱草」は句の出入りがすくなく、巨視的に見れば、現存諸本は、ほとんど同一類と見てよいほどのものである。しかし、後掲の第二表によってその一端が知られるごとく、微視的には、細部の点で多くの異同が見られる。つまり、この句集にも、宗祇自撰の段階で部分的な改訂があったものようであり、また、後人による転写の過程での不注意な誤写や恣意的な改悪などがあって、今日見られるような多様な諸本がうまれたものと思われる。

「萱草」諸本の分類の基本となるのは、「文明六年夾鐘(陰曆二月)下泝(下旬)」の奥書を持つ定稿清書本である。この奥書を持つのは前掲①伊地知本・②谷村本・⑧守武本である。⑮国会本の付載の別紙にも「一本奥書」として掲出されているが、他本よりの転記で、国会本の本来的なものではない。同じ奥書は、⑤斑山本・⑥狩野本・⑦頼原冊子本にも載るが、この⑤⑦は日付が「文明十五年六月廿五日」と変わっていて、清書本を後に写した折の日付との混同があるようである。右の諸本の内、①と②は本文がほぼ一致し、校合の結果、③頼原卷子本・④書陵部卷子本も同種の善本である事が判明した。この①④の四本の相補によって、清書本の原型はほぼ復元されるであろう。

同じ奥書を持つ⑧守武本は再度の翻刻によって現代の流布本といってもよいほどのものであり、筆者のあきらかな古写本としても唯一の貴重な本であるが、①④の第一種本にくらべると詞書がややすくなく、他本にくらべて独自異文がきわめて多い。「萱草」の出典や、「萱草」からの再録の多い「再編老葉」所収の句形とくらべてみても、守武本の独自異文は異なっていて、宗祇自身の添削推敲のあととは思われない。つまりは、守武本は清書本より数度の転写の際に変容した本という事になる。

第二種本⑤⑦は、詞書の多さや語句の点で第一種本に近接した本であるが、前節で触れたように、第六雑連歌の雑四季・雑恋を第一⑤五の各末尾に付載し、雑連歌中の旅連歌を第六の末尾に置くなど変わった配列を持つ。このように配列変更を試みたくなる契機は、第一春連歌(発句・付句)・第二夏連歌(発句・付句)・第三秋連歌(発句・付句)・第四冬連歌(発句・付句)・第五恋連歌・第六雑連歌という原初的な配列の中に内蔵されているが、十巻構成の後の宗祇の自撰句集とのつながりから見ても、第六の雑連歌の中から旅連歌を別にするという点は納得されるけれども、雑四季・雑恋を第一⑤五に戻すという事は宗祇自身の営為としては必然性にとぼしく、後人の手になるさかしらとしておくのがよさそうである。(湯之上早苗氏は前掲論考「宗祇句集『萱草』雑部の問題」で「宗祇の手になるのか後人のさかしらなのか容易に決定し難い」と慎重に述べておられる)また、この第二種本を第一種本(清書本の原型)の前段階と見る事もむつ

かしく、第三種本と同じく、この第二種本も第一種本よりの派生と考えておきたいのである。

他に、第四種⑨集書本を清書本系統に入れておいたが、この写本は、付句の部分ではほとんど詞書がなくなっている。無詞書本→詞書本という過程より詞書本→無詞書本という過程のほうが自然で、やはり、この集書本も第一種本の原型より派生したものと考えるべきであろう。

本稿では、右の①②⑨の清書本系統に対して、一試案として、⑩⑪⑬を草稿本系統にふくめてみた。草稿本といっても、清書本のように本奥書によって成立年時の確定できるものではない。その原型本が清書本以前の成立であろうと思われる諸本を仮に草稿本系統としてみたのであるが、この系統に分類した基準は、清書本系統にない特異句を有する点である。清書本系統にない特異句は前掲第一表の末尾に掲出した校合本の項でプラスアルファとして記した九句（発句三・付句六）である。次に掲出してみる。

（句頭の「二〇八の次」などあるのは活版の古典文庫本の記載番号、その左に「五六頁上一四行の次」などあるのは活版の『続群書類従、第三十六輯、拾遺部』所収本による位置を示したものである。また、句の左側には、その句を有する伝本名を記した。）

〔ア〕第二夏連歌二〇八の次

（五六頁上一四行の次）

袖にそいまは （マ） 舟 （マ）
水落る井関のすゑに田をうへて
（⑩狩野別本）

〔イ〕第二夏連歌二四一の次

（五八頁上一三～一四行）

いはふや誰も旅のはなむけ
いきの松あふきの風も千代かけて
（①伊地知本の校異・⑩狩野別本・⑪滋岡本・⑫南曲本・⑬所臘齋本・⑭天理本・⑮国会本）

〔ウ〕第三秋連歌二八三の次

（六〇頁上一九行）

あめやまつ木のした染の露の色
（同右（①の校異と⑩⑪⑫⑬⑭⑮））

〔エ〕第三秋連歌二八九の次

（六〇頁下六行の次）

朝きりに河音のほる高根かな
（⑩狩野別本）

〔オ〕第三秋連歌二九七の次

（六一頁上一行）

秋の海舟は見ぬ世の一葉かな
（①伊地知本の校異）

〔カ〕第三秋連歌三一八の次

（六二頁上一一～一四行の次）

わけてゆくかの雲の秋風
鳴子ひく稲葉の光 （ホ） 声遠み
（⑩狩野別本・⑪滋岡本・⑫南曲本）

〔キ〕第六雑連歌六六六の次

（八二頁下一四行の次）

ゆく末をたのめと神や守るらん
唐ふねのまほの追風
（⑪滋岡本・⑫南曲本）

〔ク〕第六雑連歌六九八の次

（八四頁下九～一〇行）

とひくる風を君としもかな
小夜农民におほふも昔にて
（①伊地知本の付箋・⑪滋岡本・⑫南曲本）

〔ケ〕第六雑連歌九三六の次

（九七頁下一八行の次）

君か道をそたれも学へる
帰るさの御幸の車引つ、け
（①伊地知本の付箋・⑪滋岡本・⑫南曲本）

右の特異句一覧によると、①伊地知本の校異・⑩狩野別本・⑪滋岡本・⑫南曲本の特異性が顕著である。①伊地知本は清書本系統の善本であるが校異によって付加した特異句は草稿段階の異本を参照したものであろう。⑩のような独自句を有する事は、他の草稿本の存在した事であることを証する。

⑩狩野別本は第三秋連歌の途中までの零本であり、その元の完本では〔ク〕〔ケ〕の三句も有していたかも知れない。また、〔ア〕〔エ〕のようなこの本独自の

句は元の完本にはもつと多く含まれていた可能性がある。そうであるならば、この写本は草稿本の中では初期のものに属するであろう。しかし、詞書の無いこの写本の現在の形態が本来のものとは思われない。詞書は転写の過程で省略されたのではなからうか。

⑪滋岡本・⑫南曲本の原型本は、⑩狩野別本の原型本に次ぐ段階の草稿本であろう。この⑪⑫は詞書を多く備え、第一種本に近くなっている。右に掲出した特異句の他に、第二夏連歌（古典文庫本二〇九番の次）に、

人のこゝろのかはる世の中　と云句に
百句を付侍し夏の句に
時過る身こそ六日のあやめ草

の付句を掲出し、他の諸本の普通の位置（第六雑連歌八八五番）には「人の心」時すへる」とのみある事が注目される。①伊地知本には二〇九番の位置に「異本に」として右の付合を掲出し、⑬国会本では二〇九番と八八五番に重出している。いずれも草稿本段階の揺れと解すべきか。⑪⑫共通の内題「草塵抄」も草稿段階の書名の一案であつたかも知れない。

⑬所蔵齋本は第四冬連歌までの零本で、(イ)(ウ)の特異句が元の完本に含まれていたかどうかは明らかではない。第四までの内容は⑪⑫と同様に詞書が多く、第一種本に近接している。⑭天理本（二冊本）の上冊（第一春連歌より第四冬連歌まで）の部分も詞書が多く、第一種本に近接し、良好の本文であるが、下冊（第五恋連歌と第六雑連歌）の部分は詞書が極端にすくなく、後掲の第二表（巻第五恋連歌諸本文主要異同表）に見られるように、誤写が多くて、良好の本文とはいえない。この本は前半と後半とは別種の取り合わせ本のように思われる。⑭の後半は⑮⑯⑰と共に、清書本系統に属せしむべきかも知れない。

⑱国会本は特異句を二句有するので草稿本系統に入れたが、原型本そのままではなく、転写の過程で、詞書の全くない現在の形になったものである。第五恋連歌の部の句数が異常に少ないが、とびとびの欠句で、落丁等による欠脱ではないようである。欠けている句で、後に「再編老葉」に再録された句も多く、宗祇自身の切り出しとは考えにくい。

以上、諸本の本文の性格の要点を述べた。まず、本奥書に着眼し、清書本系統を立て、それらに無い特異句を有する諸本を草稿本系統とした。次に語句の異同（後掲第二表参照）によって前述のように分類した。今日の我々が「萱草」を扱う際の定本としては清書本の原型に近い第一種の諸本を相補して用いるべきであろう。①伊地知本は四本の中では書写年代がもっとも新しいと思われるが、欠脱がすくなく校本の底本とするのに最適である。③④と等質の古写本が全巻そろえば理想的であるが現状では無理である。草稿本系統の特異句は参考として掲出するにとどめ、清書本系統による校本の中には融合させないほうがよいと思われる。

（昭和49・10・16稿）

◇第二表（巻第五恋連歌諸本文主要異同表）

※二本以上に共通する異同のみ掲出した。一本のみの独自異文はとりあげてない。

※この部分を対象にしたのは、最古の善本である③頼原卷子本を有する巻であるためである。この善本に一致する語句を○印とし、他の異文を△□◎などで示した。×はその語句を本来的に有していないもの、「欠」としたのはその句の前後が欠文となっていて、本文の性格の不明の部分である。（④書陵部卷子本・⑩狩野別本・⑬所蔵齋本は、この巻の全文が欠けている。）

※所在の数字は古典文庫本の記載番号。「詞」は詞書、「前」は前句、「付」は付句の略。「中」は前句と付句の中間のつなぎの詞。

部立	所在	異同語句	諸本																
				伊谷	谷	類	類	類	類	類	類	類	類	類	類	類	類	類	類
四八八詞	○恋連歌 △恋の連歌	○千句の連歌のうちに △千句連歌の内に □千句の内に ×ナシ	○ ○ ○ 欠	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯
四八八中	○と云句に ×ナシ	○うくはかりなる △うくはかりなり	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
四八九前	○アリ ×ナシ	○アリ ×ナシ	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
四九三詞	○アリ ×ナシ	○アリ ×ナシ	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
四九八前	○ふるき △ふかき	○ふるき △ふかき	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
四九八付	○むかしも △けふるも	○むかしも △けふるも	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五〇〇前	○名にたつほと △名の の立ほと △名たつね	○名にたつほと △名の の立ほと △名たつね	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五〇二詞	○所望せしつかはし侍 し △所望し侍りしにつ かはしける □所望し侍 りし ×ナシ	○所望せしつかはし侍 し △所望し侍りしにつ かはしける □所望し侍 りし ×ナシ	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五〇四前	○此身よ △この身に □この身は ◎この身を	○此身よ △この身に □この身は ◎この身を	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五〇四前	○かくきむ △かへさん	○かくきむ △かへさん	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五〇四中	○といふ句に ×ナシ	○といふ句に ×ナシ	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五〇四付	○ものおもひ △我おも ひ	○ものおもひ △我おも ひ	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五〇五前	○とはすと △とはすて	○とはすと △とはすて	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五〇八付	○音もれて △音もせて	○音もれて △音もせて	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五〇九付	○はかなの △はかなき	○はかなの △はかなき	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五〇九付	○中や △ことや	○中や △ことや	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五一一詞	○千句の連歌のうちに △千句の内に ×ナシ	○千句の連歌のうちに △千句の内に ×ナシ	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五一一付	○うし △なし	○うし △なし	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五一四詞	○アリ ×ナシ	○アリ ×ナシ	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

部立	所在	異同語句	諸本																
				伊谷	谷	類	類	類	類	類	類	類	類	類	類	類	類	類	類
五一六詞	○北畠大納言家へ △北 畠大納言家に ×ナシ	○北畠大納言家へ △北 畠大納言家に ×ナシ	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五一六付	○あさきえを △あさき 江に	○あさきえを △あさき 江に	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五一七中	○といふ句に ×ナシ	○といふ句に ×ナシ	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五一七付	○しほを △しほ、 □塩の	○しほを △しほ、 □塩の	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五一八付	○いかかせん △なにか せん	○いかかせん △なにか せん	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五二二付	○見せて △みえて	○見せて △みえて	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五二三前	○いは、 △いか、 ○北畠大納言家より承 し百句に △に奉りし 百句のうちに □にた てまつりし百句に ◎に より承たる句に ×ナシ	○いは、 △いか、 ○北畠大納言家より承 し百句に △に奉りし 百句のうちに □にた てまつりし百句に ◎に より承たる句に ×ナシ	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五二四詞	○といふ句に ×ナシ	○といふ句に ×ナシ	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五二五中	○かへるいもの △婦 るもいもの	○かへるいもの △婦 るもいもの	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五三六付	○いか、こむ △いか、 せん □誰かこむ	○いか、こむ △いか、 せん □誰かこむ	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五三七付	○あたる人 △ある人は ○この葉をさへ △こ との葉をたに □我こと のはを	○あたる人 △ある人は ○この葉をさへ △こ との葉をたに □我こと のはを	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五三七付	○たへわひて △た、わ ひて	○たへわひて △た、わ ひて	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五四一付	○アリ ×ナシ	○アリ ×ナシ	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五四三詞	○といふ句に ×ナシ	○といふ句に ×ナシ	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五四四中	○とかむな △とかむる	○とかむな △とかむる	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五四四付	○アリ ×ナシ	○アリ ×ナシ	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五五二詞	○聞もかな △聞もかな	○聞もかな △聞もかな	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五五二付	○アリ ×ナシ	○アリ ×ナシ	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
五五五詞	○アリ ×ナシ	○アリ ×ナシ	○ ○ ○ 欠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

所在	異同語句	諸本															
			①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
五六四前	○なみだなりけり みたおちけり △な	○ ○ ○ 欠	伊谷 谷類 卷書	斑 狩 冊類	守	集	別狩	滋南	所	天原 類内 類静	国						
五六五前	○わかれていなん △別	○ ○ ○ 欠		○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
五六九詞	○アリ ×ナシ	○ ○ ○ 欠		△ △ △ △	△ △ △ △	△ △ △ △	△ △ △ △	△ △ △ △	△ △ △ △	△ △ △ △	△ △ △ △	△ △ △ △	△ △ △ △	△ △ △ △	△ △ △ △	△ △ △ △	△ △ △ △
五七〇前	○つみに △つみの	○ ○ ○ 欠		○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
五七〇前	○あふせと △あふせは	○ ○ ○ 欠		○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
五七一前	○恋わふるとは △恋わ ふるをは □恋わふるこ とは	○ ○ ○ 欠		○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
五七一中	○といふ句に ×ナシ	○ ○ ○ 欠		○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
五七三付	○いかにせん △いか、 せん	○ ○ ○ 欠		○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
五七四付	○はてし △はて、 せん	○ ○ ○ 欠		○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
五七五前	○おもひに △おもひよ いかにせん △いか、 せん	○ ○ ○ 欠		○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
五八一付	○かくる △か、る せん	○ ○ ○ 欠		○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
五八四付	○空も △雲も せん	○ ○ ○ 欠		○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
五八八詞	○アリ ×ナシ	○ ○ ○ 欠		○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
五九三付	○あた人を △あたと なかつち △中うち	○ ○ ○ 欠		○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
五九六詞	○アリ ×ナシ	○ ○ ○ 欠		○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
五九七詞	○アリ ×ナシ	○ ○ ○ 欠		○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
五九七前	○たれに △誰か ○思ひつ、けて △おも ひにつけて	○ ○ ○ 欠		○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
五九八前	○思ひつ、けて △おも ひにつけて	○ ○ ○ 欠		○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○
五九九詞	○アリ ×ナシ	○ ○ ○ 欠		○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○

〔付記〕

「萱草」の伝本の所蔵者・所蔵機関各位に深くお礼申し上げます。
 なお、本稿は、昭和四十八年度文部省科学研究費（一般研究D）によ
 る「宗祇自撰句集の本文の研究」の一部分をなすものである。